

恵庭かわまちづくりの取組みについて

札幌開発建設部 千歳川河川事務所 計画課 ○石山 実和
山口 昌志
高橋 洋介

花のまち北海道恵庭市では、ガーデンデザインプロジェクトとして職・住・観光機能拡充のため道と川の駅周辺を花のビレッジと位置づけ、恵庭市による花の拠点整備や民間事業による新住宅団地を建設している。恵庭かわまちづくり計画では、これらの事業や令和4年度に開催が決定した第39回全国都市緑化北海道フェアと河川管理者が連携して石狩川水系漁川の良い水辺空間を創造し、観光地の魅力や居住環境の向上を図っている。

キーワード：かわまちづくり、地域交流・連携、地域活性化

1. はじめに

国土交通省では、河川空間とまち空間が融合した良好な空間形成の円滑な利用推進を図るため、地域との連携の下で立案された地域の魅力向上を目指す計画について登録を行う「かわまちづくり」支援制度を推進している。

かわまちづくりとは、河川とそれに繋がるまちを活性化するため、地域の景観・歴史・文化及び観光基盤など地域の魅力という「資源」や地域の創意に富んだ「智慧」を活かし、市町村、民間事業者及び地元住民との連携のもとで、実現性の高い河川や水辺の整備・利活用計画により、河川空間とまち空間が融合した良好な空間形成を目指し、円滑な利活用推進を図る取り組みである。

平成21年度より取り組みを進めており、令和3年8月時点で244箇所が登録されている。

2. 地域概要

(1) 恵庭市の概要

北海道恵庭市は、札幌市と新千歳空港のほぼ中間に位置する人口約7万人の都市である（図-1）。市内に4つのJR駅が存在するほか、国道36号、道央自動車道・道東自動車道など交通アクセスに恵まれた立地特性を有している。早くから住宅地整備を進めると共に、公共下水道や大学・専門学校、工業団地等の都市基盤の整備が進められ人口が増えてきた。

支笏洞爺国立公園を後背地とした恵庭溪谷には「白扇の滝」や「ラルマナイの滝」等の観光スポットが存在するほか、恵庭市街地を貫流する漁川の下流部には田園地域が広がる。最近では市民主導による花のまちづくりが盛んで、「ガーデニングのまち」として全国的に知られるようになり、令和4年6月に全国都市緑化フェアの開催が決定している。

(2) 漁川の概要

漁川は支笏湖を源とする一級河川石狩川水系千歳川の支川であり、流路延長44.8km、流域面積163.4km²を有している（図-2）。恵庭市街地では、約1/200の河床勾配を持つ急流河川であるが、下流の千歳川との合流付近では約1/900と勾配が緩くなっている。

周辺の土地利用は、国道36号よりも下流側は農地が多く、上流側は恵庭市街地として発展している。道央自動車道を越えると山地へ入っていき、上流域には洪水の調節、流水の正常な機能の維持、水道用水の供給を目的として、千歳川流域唯一の多目的ダムである漁川ダムが昭和56年3月に完成している。また、漁川はサケ・サクラマス・カワヤツメ等の生息に適した河川であり、サケに関しては古くから人々との関わりが記録に残っている。



図-1 恵庭市と事業実施箇所

3. 地域の取り組み

(1) 関連する地域の主要な施策

a) 第5期恵庭市総合計画

「花・水・緑 人がつながり 夢ふくらむまちえにわ」を将来都市像として掲げ、市民、議会及び市がそれぞれの役割を果たすことにより、将来にわたって活力のあるまちの実現を目指すこととした、平成28年から令和7年にかけての10カ年の総合的なまちづくりの指針である。

b) 新水と緑のやすらぎプラン、新えにわ花のまちづくりプラン

恵庭市は、総合計画をもとに戦略プロジェクトの基軸として昭和62年に策定した「水と緑のやすらぎプラン」をまちづくりの具体的な事業指針として位置付け、道路・公園・河川等の事業整備を展開してきた。自然との共生や協働によるまちづくりという近年の価値観の変化に対応し、「新水と緑のやすらぎプラン」を策定し、恵まれた大地を形成してきた漁川等の「水」と四季折々に多彩な姿を呈する「緑」を軸にしたネットワークの形成など、持続発展型の都市づくりを進めている。

「新えにわ花のまちづくりプラン」は、花のまちづくりを実践してきた市民と行政が、ともに花のまちづくりを目指す行動の呼びかけや、実践にあたっての行動指針として策定されたもので、市民・行政・団体・企業が花と緑を生かした環境を作りながら人をつなぎ、豊かな心を育むことで、まちに暮らす人々が幸せな時間を過ごすことを目指す。街並みと一体となった公園整備、花のまちづくりの拠点、花や緑に関する情報発信等を行うことをうたっている。

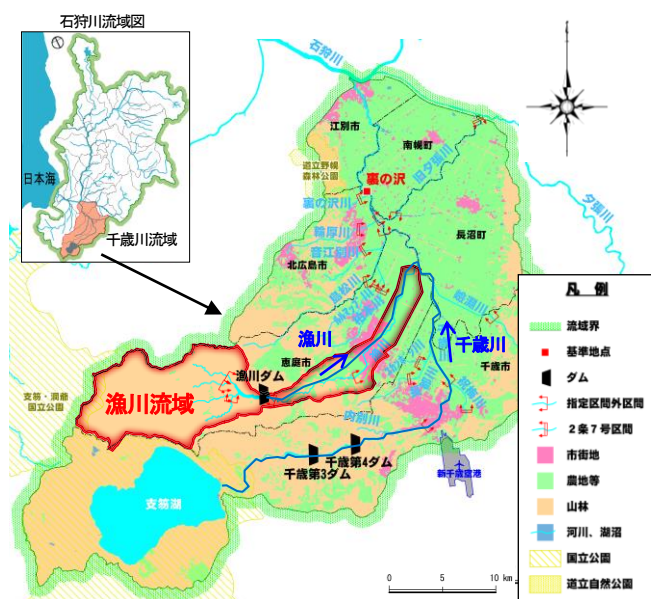


図-2 漁川位置図

c) 緑の基本計画

都市緑地法に基づく計画であり、緑地の保全及び緑化の推進として、多くの市民が多様な自然と触れ合える環境を創出することを目標としたものである。公共公益施設及び民有地の緑化に関する方針を定めることにより、市民や各種団体・事業者・行政の連携と協働により総合的な緑化を計画的かつ効果的に推進する指針となるもので、河川の保全や市民が憩える水辺環境づくり、花のまちづくりの推進がうたわれている。

d) 道と川の駅「花ロードえにわ」

恵庭市を「通過するまち」から「情報発信するまち・たまるまち」に転換するべく、道路行政と河川行政が連携して「道と川の駅整備事業」として社会実験的に整備されたものである。道の駅が備える休憩・情報発信・地域連携機能を持ちながら、サケの産卵する漁川に隣接する立地を活かし「漁川水辺プラザ事業」として親水性・自然学習・流域や地域の情報発信機能を備え、地場産品の紹介や市のPRができる都市と農村の情報交流施設として、国道36号に面し平成18年度に供用開始した。現在では年間100万人以上の来訪者がある。

(2) ガーデンデザインプロジェクト

前述の各施策において共通して掲げられている「花・水・緑」のまちづくりを具体化するために策定され、官民連携を念頭に置き、花やガーデニングのまちとしてのイメージや食などの地域資源を生かした交流人口増加による幅広い地域産業の活性化を一体的複合的に進めていく恵庭市総合戦略のプロジェクトである(図-3)。

このプロジェクトの中で、職・住・観光機能の拡充を目指し、道と川の駅に隣接して整備予定である花の拠点、新住宅団地に加えて、漁川の河川空間を「花のビレッジ」として位置づけ、河川管理者と連携してかわまちづくりを行うこととした。

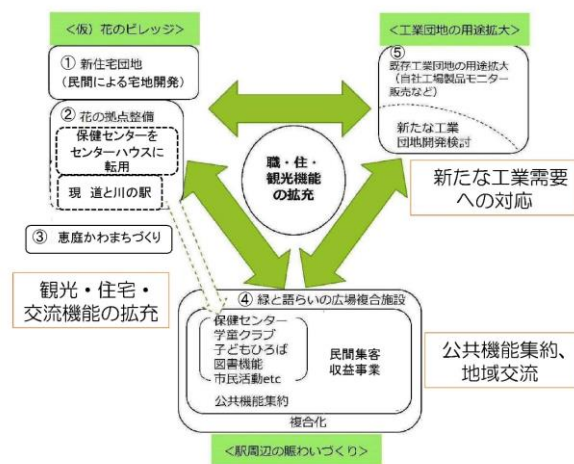


図-3 ガーデンデザインプロジェクトのイメージ

(3) 河川利活用状況

河川に隣接した漁川河川緑地（都市公園）の整備により、市民の憩いの場として河川空間が一体的に利用されているほか、健康・余暇等多用途利用として、漁川河川緑地におけるテニスコート、野球グラウンド、パークゴルフ場等を多数の市民が利用し、また河川管理用通路を活用したウォーキング、歩くスキー等の余暇健康増進的利用がされている。

道と川の駅に隣接して一般道道札幌恵庭自転車道の延伸が計画されている。同自転車道は、札幌市中央区と恵庭市を結ぶ計画延長38.4kmの自転車道である。そのうち、平成26年9月時点において、札幌市内から途中の北広島駅前まで24.5km、北広島市の富ヶ岡地区の約3.4kmが開通している。今後、道と川の駅を経て、JR恵庭駅に至る計画となっている。

漁川における環境啓発活動（図-4）として、「えにわ市民サケの会」主催により、毎年4月下旬に市内の小中学校で飼育したサケ稚魚を放流する活動を、「漁川ラブリバー振興協会」の主催により、毎年6月下旬にサクラマス稚魚約5,000尾を放流する活動を行っている。また、千歳川河川事務所主催で、小学生以上を対象に川や水の大切さを学ぶ体験環境学習「かわ塾」を実施している。



図- 4 環境啓発活動
(左：サケ稚魚放流会 右：かわ塾)

花のまち恵庭を北海道一の桜の名所とするため平成27年4月に設立された「恵庭一万本桜植樹市民の会」が、30年後に市民に親しまれる桜並木を目指して、平成27年6月より10年かけて桜の木の植樹活動を進めている。

恵庭かわまちづくり計画により、これらの河川利活用時の活動空間の拡大、利便性が向上されることによる利用者の増加が見込まれ、さらに新たなイベント等の開催が期待される。

4. 恵庭かわまちづくり計画

ガーデンデザインプロジェクトの観光、住宅、交流機能の拡大を実現するため、計画エリアを3つにゾーニングし（図-5）、道と川の駅「花ロードえにわ」及び隣接する花の拠点点を「花の拠点ゾーン」とし、「住宅団地ゾーン」として「スマートタウンふれる恵み野」を整備するとともに、漁川に面する河川空間を「かわゾーン」として、親水性や利便性を高める整備を行う計画として「恵庭かわまちづくり計画」を策定した。

河川空間が日常のレクリエーションの場となり、近隣住民が気軽に豊かな自然と触れ合えるような施設を整備するとともに、市外から訪れた観光客にとって魅力あるエリアをつくり、新しい恵庭市の観光交流拠点の創出を目指す計画である。かわゾーンについては「都市・地域再生等利用区域」に指定することで、オープンカフェや売店を設置し、豊かな時間を過ごすことができる河川空間を創出するものである。

恵庭かわまちづくり計画は平成30年3月に登録され、令和元年度に事業着手し令和5年度の完成を目指して整備中である。



図- 5 恵庭かわまちづくりのゾーニング

(1) かわゾーン

漁川へのアクセス向上のための管理用通路及び親水施設の整備を行うゾーンである（図-6）。河岸際に繁茂しているヤナギ林を伐採することで水面の眺望を確保し、親水護岸等の整備により水際に近付きやすくすることでサケ稚魚放流や観察等の環境学習、流れを見ながらの休憩など、新たに水際での安全な親水活動の場を整備する。

隣接する花の拠点でのイベントと連携を可能にするため、散策路や管理用通路、イベントスペース等の基盤を整備し、新たに水辺のイベント空間を創出する。隣接する住宅地との境界部分においても散策路や修景水路等を整備し市街地と水辺の連続性を高める。右岸側においては新たに管理用通路を整備し、水辺の散策や自然観察等ができる新たなレクリエーション空間を創出する。

イベントスペース等をメインとして「都市・地域再生等利用区域」に指定することで、オープンカフェやキッチンカー等による経済活動を可能とし、道と川の駅および花の拠点の利用客を誘導し、親水利用を高める。また、整備対象区間は北海道におけるサイクルツーリズム推進モデルルート（石狩川流域圏ルート）に選定されており、サイクリストに公園や交流の場で休憩・滞在してもらうことを目的として、休憩施設や案内表示を整備する。

(2) 花の拠点ゾーン

年間を通して花と緑の鑑賞ができる交流・休憩機能を備えるセンターハウスや庭・ガーデンをイメージした公園など、道と川の駅や漁川の河川空間、住宅団地と一体となった公園緑地の整備を行うゾーンである（図-7）。

花の拠点を「はなふる」と銘打って花の拠点ゾーンの核として整備することで、全国的に「花のまち恵庭」の

知名度を浸透していく新しい恵庭の観光拠点として、気軽に花と触れ合い、観光客・レクリエーション客にとって魅力のあるエリアをつくる。また、市民がまちの魅力を知り、楽しみ、育て、情報発信をしていくための環境整備を行い、観光振興計画の基本理念である観交まちづくりの拠点となることを目指したものである。

メインエリアとなるガーデンエリアは、7つのエリアにそれぞれ特色あるコンセプトのもと、市民の憩いの場として、また花を中心とした各種イベントを開催する施設である。

センターハウスは旧保健センターを改修し、1階に恵庭観光協会が運営する恵庭観光案内所を設置し、恵庭市の魅力や観光スポット、イベント等の情報を提供し、2階には親子で楽しめる遊び場を併設する。センターハウスに隣接してRVパークを整備し、キャンピングカー等利用者の車中泊の利用を想定した駐車場や電源設備を備え、センターハウス内には24時間営業で無料のシャワー



図-7 花の拠点ゾーン整備概要

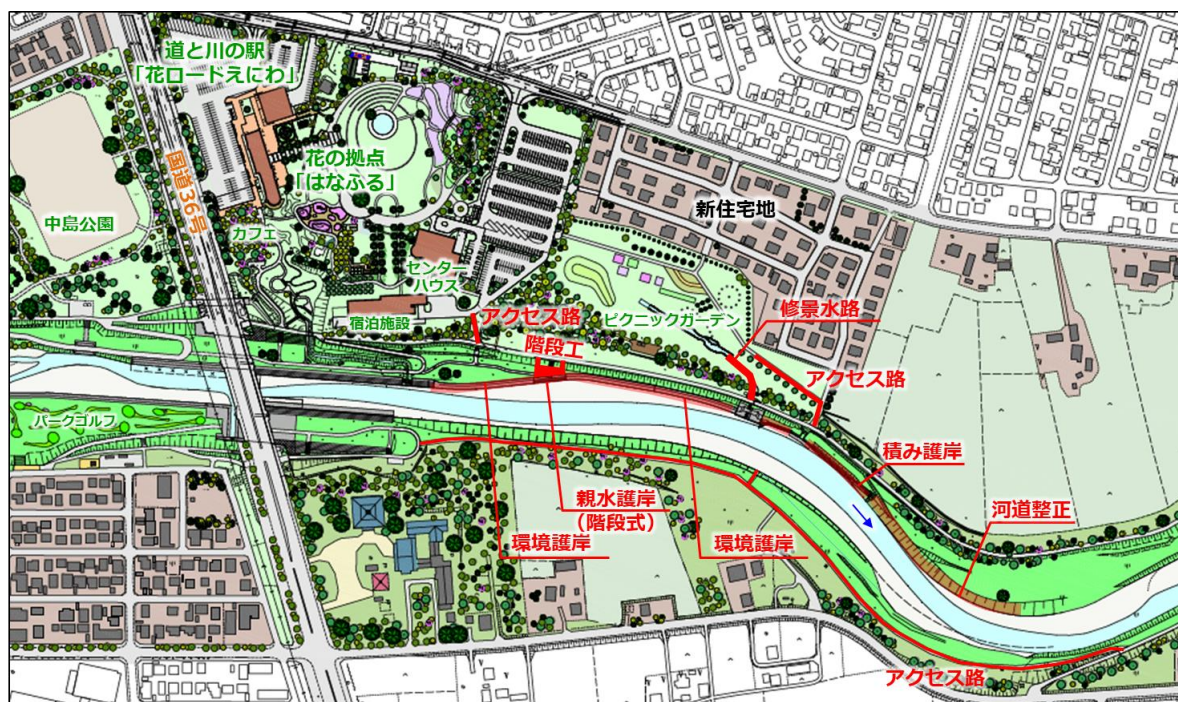


図-6 恵庭かわまちづくり全体図とかわゾーン整備概要

室やキッチン等を整備する。ゾーン内には、4階建、100室程度の客室を備える宿泊施設や、全国展開しているカフェ等の出店を計画した。

(3) 住宅団地ゾーン

花の拠点ゾーンやかわゾーンと一体的な景観形成を図る官民連携環境配慮型住宅団地「スマートタウンふれる恵み野」を造成し、河川と公園緑地の連続・連携した自然環境と景観を生かし、省エネ・創エネ・低炭素型設備導入等の環境に配慮した民間開発行為によって住宅地を整備する。

(4) 地域との議論

花の拠点の整備は、恵庭市、地域団体、有識者、公募者（市民）からなる「恵庭水と緑のまちづくり審議会」及び「恵庭市観光推進協議会」において議論されてきた。平成29年8月、11月の審議会及び同年10月の協議会において、恵庭市と河川管理者が連携して実施する「恵庭かわまちづくり計画（素案）」について意見交換を行った。また、恵庭河川愛護会や恵庭一万本桜植樹市民の会とも協議を行い、意見を聴取した。

3つのゾーンを一体的に整備する際の具体的な要望や恵庭市のまちづくりの柱である「花・水・緑」の拠点としての充実、オープンカフェの設置、景観への配慮等の意見が上がったほか、近年の災害を受けて河畔林の治水面および景観面からの伐採など、かわまちづくりと両立した治水対策の要望も上がった。これらの意見を反映し、恵庭かわまちづくり計画が策定された。



図- 8 恵庭かわまちづくりエリアの整備状況（R3.7撮影）



図- 9 河岸際へのアクセスの確保

5. 第39回全国都市緑化北海道フェア

全国都市緑化フェアは、都市緑化意識の高揚、都市緑化に関する知識の普及を図り、緑豊かな潤いのある都市づくりに寄与することを目的に、昭和58年に大阪で第1回が開催されて以来、現在までに毎年開催されている。北海道では昭和61年の札幌市での開催に続き2度目の開催となる。毎年多くの来場者を迎える大規模イベントとして定着し、地域住民の緑化意識の高揚、観光客の誘客、造園・花き園芸産業の発展、地域振興に寄与するなど、経済波及効果が高い花と緑の祭典である。

第39回全国都市緑化北海道フェア（愛称：ガーデンフェスタ北海道2022）（以下、フェア）は、令和4年6月25日から同年7月24日にかけて、恵庭市の花の拠点「はなふる」をメイン会場として、これまで築きあげられてきた「恵庭の花の文化・市民の文化」の魅力が集約され、北海道の花と緑の文化を広く全国に発信する理念のもと開催される。

恵庭かわまちづくりでは、フェアにおける活動や会場整備と共に一体となって新たな拠点となるべく進めている。また、フェア開催期間中には、恵庭市と連携してキッチンカーを河川空間に配置し、その効果を検証するなど、将来の利活用に向けた検討を行う予定である。

6. 整備状況

恵庭かわまちづくりの整備状況を図-8に示す。かわゾーンにおいては、令和4年度のフェア開催に合わせ会場に接する左岸側から整備を進めている。令和3年度までに景観阻害にもなっていたヤナギ林の伐採や親水護岸、階段等の整備による親水性やアクセス性の確保（図-9、図-10）、花の拠点との連続性を高める管理用通路や散



図-10 階段式の親水護岸



図-11 幼稚園児らによる「たねダンゴ」植え

策路、修景水路等を整備した。フェア開催後には右岸側のアクセス路としての管理用通路や水辺への親水性を高める整正等を行う予定である。またフェア開催に向け、高水敷や階段花壇への植栽を地域の幼稚園児たちと行った。植物の種子が入った「たねダンゴ」を花壇に植えるなど、地域と連携した活動を行っている（図-11）。

花の拠点ゾーンについては主に恵庭市が主導して整備を進めており、花の拠点「はなふる」が令和2年11月にオープンした。ガーデンエリアは北海道を代表する11名のガーデナーによって設計された（図-12）。また、恵庭農畜産物直売所「かのな」の新築移転（図-13）、センターハウス内のリニューアルによる親子で遊べるスペースのえにわファミリーガーデン「りりあ」、RVパーク等の施設を整備し営業している。現在はフェア開催に向けて、残る植栽や散策路の整備等を継続し実施している。宿泊施設はフェア開催までの開業を目指して整備中である。新規出店のカフェについては、道と川の駅に隣接して令和3年12月に完成し開業したところであり、集客力の向上につながっている。

住宅団地ゾーンの「スマートタウンふれる恵み野」は、平成30年10月に完成した。生活道路のほか、花の拠点やかわゾーンにつながる通路を整備した。ふれる恵み野の造成戸数は55戸で、各戸では区画平均363㎡と広さを活用した庭造りを楽しむことができ、民間ガス会社と連携したガスマイホーム発電機器の導入が推奨されており、温室効果ガス削減の期待と、停電発生時も発電できるという防災面で利点を有している。

7. 恵庭かわまちづくりの効果について

前述の地域の取り組みとの連携やフェアと一体となった整備や運用によって、恵庭かわまちづくりが「花のまち恵庭」においてシンボリックな拠点として認知され、持続的な展開や活動が期待できるものとなる。

ハード的な整備については前述した通りであるが、ソフト的な施策としては「恵庭・花とくらし展」、「えにわマルシェ」、「えにわシーニックナイト」等をはじめとする様々なイベントが開催され、花の拠点ゾーンとかわゾーンを一体化させた取り組みが可能となる（図-14）。フェアにおいては、花の拠点とかわゾーンを繋ぐアクセス路の整備や親水性の向上により、来場者が川岸

等に近付いたり、高水敷上に並んだキッチンカーやオープンカフェにより川の流れを見ながら飲食を楽しむ等の河川利用の高度化につながる。また、「スマートタウンふれる恵み野」を始めとする近隣住民のアクセス性が向上することで、地域の憩いの場としての利用や、従来から散策やウォーキング利用が活発であるため、このような利活用において更に利便性の向上につながる。

道と川の駅の拡充、宿泊施設やカフェ等の開業とあわせて、恵庭かわまちづくりにより通過型観光から滞在型観光へと転換し、恵庭市が目指すまちづくりと一体となった「花・水・緑」の新たな観光拠点の創出と情報発信が実現する。

8. 今後の取り組み

令和5年度を目標にハード整備を実施していく予定であるが、フェアに合わせて左岸側を先行して供用開始する。供用後の利活用状況から課題点を抽出し解消するとともに、全体完成後は活発的な利活用がなされるよう、広報活動に力をいれていく必要がある。SNSを用いた広報活動を始め、かわたび北海道によるPRや、道と川の駅やエリア内で営業している集客力の高い施設と連携し利用客にPRすることで、Twitter・Instagram等での広がりを目指す必要がある。

将来的には、前述した「都市・地域再生等利用区域」に指定することで、河川空間のオープン化を図り恒常的にオープンカフェやキッチンカー等の営業活動が可能となることで、より利便性を高めることができ持続的な展開に繋がる。これらの実現に向けてフェアによる試行的取り組みから具体案を検討していく。

また、現在整備中の一般道道札幌恵庭自転車道や、恵庭市において策定中の「恵庭市自転車活用推進計画」を受けたサイクルツーリズム推進のためのハード、ソフト整備についても恵庭市や北海道と連携して取り込んでいく必要がある。

全体整備完了後に利活用の実態や課題点等の意見聴取を踏まえて改善していくことで、より良い「かわまちづくり」へと繋がる。このような整備後のモニタリングや地域の関係団体、オピニオンリーダーとの連携等、持続的な取り組みに向けた仕組み作りが重要となるため、今後も恵庭市と連携しながら検討し進めていく。



図-12 ガーデンエリア



図-13 恵庭農畜産物直売所「かのな」



図-14 えにわシーニックナイト